

アラタ
カズラ
ミキト

叔父
サエ
郵便の人

ユメ
トマリ
メグミ

舞台中央には四角く底上げされた叔父の場所がある。(畳)
その中央には小さなテーブルがあり、簡単に移動できる。
後方には小さな棚があり、その中には複数の本や小物が入っている。
中には明らかに叔父の私物で無いものもある。

OP

客明が落ち、一瞬の間。舞台より、チリンと音がする。明転。

郵便 おてがみです。下井さん。お手紙です。

叔父 はいはい。

ユメ 誰から？

叔父 んー？お仕事の手紙だった。

ユメ じゃあいいや。

叔父 じゃあ、これで

郵便 ありがとうございますー。

郵便捌ける。

サエ おじさんこんにちは。

叔父 お。サエちゃんこんにちは。

サエ ユメ。遊びに行こう。

ユメ 待ってたよー。行こう。

叔父 気をつけてなあ。

ユメ ばいばい。

叔父 ばいばい。

アラタ、登場。

アラタ こんにちは。

叔父 いらっしやい。

アラタ お世話になります。

叔父 今日から、俺がお父さんだ。

アラタ 父さん。

叔父 ああ、そうだ。で、ここが我が家だ。来年になったら部屋もあるぞー。

アラタ でも…。
叔父 遠慮するな、父さんも母さんも、アラタが元気なのが一番だ。ほら、友達迎えに来てるぞ。
カズラ アラタ。あそこの空き地にでつかいトンボいるぞ。
アラタ まじか。

叔父、小さなカメラをアラタに渡す。

叔父 プレゼントだ。

アラタ ありがとうございます。

叔父 ありがとうございます。でいいんだよ。

アラタ ありがとうございます。

カズラ はやく。

アラタ 行ってきます！

叔父 車には気を付けるんだぞ。

アラタ はい。

サエ、出てくる。

アラタ サエさん、こんにちは。

サエ あれ、大きくなっただねアラタ。

アラタ 幾つだと思ってるの。

カズラ だれ？

アラタ 隣の家のサエさん。

カズラ 大学の同期のカズラって言います。

サエ こんにちは。どうしたの二人して。

カズラ ちよつと、学校祭用の写真撮りに。な？

アラタ うん、

サエ 気をつけてね。

二人 じゃあ。

子供たちとすれ違う。

トマリ 置いてくぞー。

メグミ はやく！

ユメ まってー。

子供たちは舞台上で遊びだす。

カズラ アラタ、行くぞ。

アラタ おう。ちよつちまって。

アラタ、カメラを取り出す。

カズラ なんだ？

アラタ 夕日に向かって走っていく子供。いいなあ。

カズラ あの人きれいだなあ。いいなあ。

アラタ サエさんな。親父とも仲いいよ。

カズラ 大人のおねえさんていいよな。

アラタ それはわかる。

サエ アラタ、も大学生ですね。

叔父 ああ、ここに来たときはこんな小さかったのになあ。

サエ 叔母さんは、

叔父 庭で草いじってるよ。

サエ …手紙ですか。

叔父 うん。日記みたいなものだよ。

叔父、手紙を書いて引出にしまつて手を合わせる。

サエ あの…。

叔父 うん、まあ、あはは。

郵便 ちりん。お手紙です。

アラタ じゃあ、一枚。はい。

郵便の人、ポーズをとり。かしやりと。そのままストップモーション。

子供 遊園坊「ハイソウ公演」

親子 お手紙。

暗転。OP終了。

明転。ミキトがいる。そこにアラタが少し罰が悪そうに來ている。

アラタ すみません。

ミキト アラタ君こつち。

叔父が出てくる。

叔父 アラタ、

アラタ 父さん。

叔父 どこに行つた。母さんずっと待っていたんだぞ。とりあえず、母さんに会つてこい。

叔父、捌けていくアラタ、ミキトはその場に取り残される。

ミキト アラタ君。

アラタ はい。

ミキト お仕事とか、いろいろあるからね。

アラタ 母がお世話になりました。

ミキト いえ、僕は何も。ここ二、三日すごく体調良かったんだけどね、昨日の晩からすこし熱が出て…。

アラタ はい。

ミキト あと、これ。

ミキト、アラタに手紙を渡す。

ミキト お母さんから、渡してくれって頼まれてたんだ。

アラタ 僕にですか？
ミキト うん。
アラタ 本当に、
ミキト そうだよ。
アラタ 僕に。
ミキト どうしたんだい、アラタ君。
アラタ いえ、なんでもないんです。
ミキト ……そう。ならいいんだけど。
アラタ あの、本当にありがとうございます。
ミキト じゃあ、行きましようかお母さんに会いに。
アラタ はい。
ミキト こちらです。

ミキト、捌ける。アラタが取り残され、アラタは舞台中央の実家へと。
サエが入ってくることで葬式後へと変わる。アラタはうなだれている。手紙を眺めて、どこかにしまふ。

サエ アラタ。
アラタ サエさん。ほんとありがとうございます。何から何まで…。
サエ いいのよ。あ、お母さんの写真、あれ誰選んだの？
アラタ 僕。
サエ やっぱり？いいセンスしてるね。それなに？
アラタ ミキトさんから…母さんの最後の手紙だって。
サエ アラタに？
アラタ ……そうらしいよ。
サエ らしいって。

叔父登場

叔父 サエちゃん、忙しいのにごめんね。
サエ いいえ。お世話になりましたから。

叔父、そうか、うんうん。と言いながら

サエ もう読んだの？

アラタ いや…まだ。

叔父 ……手紙か。

アラタ 母さんかららしい。ミキトさんから。

叔父 ああ…。ミキト君から電話あったかな？

アラタ いや。

叔父 そうか。

サエ ミキトさんて、病院の？

叔父 そうそう、しゅっとした子。

サエ わかりますよ。

アラタ 母さん、入院してた病院の手続き。まだ終わってなくて。

サエ ……そう。

アラタ うん。

サエ じゃあ、電話なったら、

叔父 いやいや、そこまではいいよ。アラタも居るし…。居るよな。今日ぐらいは。

アラタ 大丈夫だよ。明後日まで仕事入れてないから。

叔父 仕事だったって、自由にやってるんだろ。
アラタ 写真撮るのだからタダじゃないんだよ。向こうの予定とか、
サエ おかあさんの写真よかったよ。ナイス。ナイスセンス。
アラタ うん。
叔父 いやあ、色々やることあるんだね。
アラタ あとは、納骨と四十九日だけだから。
叔父 あと、病院とか保険とかの書類もあるから。
アラタ わかってるよ。

カズラ入ってくる。

カズラ おう。
アラタ おお、
叔父 カズラくんもありがとうね。
カズラ いいえ、世話になりましたからね。大学の時終電のときとか。
アラタ ああ、あったな。
サエ 何それ。
カズラ フラれて、アラタとずっと酒飲んで。
叔父 ここでな。
サエ えー。呼ばれてないよ。
カズラ その時たぶんまだちゃんと話したことなかったから。
サエ で？お泊り。
カズラ そうそう。そのままここから大学行ったんだよな。
アラタ ちがうよ、お前は頭痛いからって休んだんだよ。俺の家で。
サエ 帰れよ。
カズラ だっておばさんが、「いいよ、いいよ。何食べたい？」って言うてるから。
アラタ 優しいんだよ。母さんは。
カズラ な。
サエ うん、そうだね。
アラタ 一度や二度じゃないから。
叔父 はは…。
サエ カズラ君けっこう入り浸ってたよね。
カズラ 居心地良いんすよねえ。
アラタ そうか？
カズラ めちゃくちゃ。
サエ 居心地いいよね。この家。

少しの間。叔父、携帯が鳴る。

叔父 はい…。ああ、ご無沙汰してます。ええ。あー、ちょっと待ってくださいね。

叔父、電話の途中で、居なくなる。

サエ 今日は何？
カズラ ああ、一応泊まります。
サエ そう。
カズラ サエさんは？
サエ 帰るって言っても一軒隣だからね。
カズラ ですよ。あ、
アラタ なに？

カズラ 靴下だけ変えるの忘れてた。

カズラ、靴下だけ黒い。

アラタ 別にいいんじゃない？

カズラ これ親父の奴だからさ。なんか、かかと気持ち悪いんだよ。

アラタ なんて借りたんだよ。

カズラ 片方ずつ見つかったさ。微妙に色ちがうんだよ。左右。

サエ あー。あるある。

カズラ ちよつとはきかえてくるわ。

カズラ、捌ける。

アラタ …。

サエ なんか手伝えることあったら言ってね。おねえさん頑張っちゃう。

アラタ ありがとうございます。

サエ かしこまらないでいいよ。

アラタ 俺、葬式とか初めてだから、何していいのかわかんなくて、

サエ …。

アラタ あ、あれね。記憶に残ってるのはってことね。

サエ ちよつと。

アラタ 冗談だよ。…親父にまかせつきりだ。

サエ 良いんだよ、そんなのは。

アラタ なんかしなきゃって思ってたんだけど、すごいな。親父。てきぱき。

サエ 最近どうなのこっちは。

サエ、アラタのカメラを指して。

アラタ ありがたいことに、仕事ももらえるようになってきたよ。

サエ 楽しい？

アラタ そりゃ、自分の好きなことでご飯食べれば

サエ そうよねえ。私もやってみようかな。

アラタ 写真好きなの？

サエ いや。ぜんぜん。

アラタ じゃあ、

サエ ブリーダー。

アラタ ブリーダー？

サエ 私、犬好きなの。犬、かわいいじゃない。犬。

アラタ いぬ。

サエ ちっちゃいのもかわいいけどさ。やっぱり大型犬。セントバーナードとか。もふもふの

サモエドとか。

アラタ はあ。

サエ 大型犬の口の周りってさ、こう黒くふちどりされてるのね。

アラタ へえ。

サエ よく見てるでしょ。そりゃ好きだからね。

アラタ きいてないよ。

サエ あれってなんで黒くなってるんだろ。ゴムパッキン見たいなのよ。お弁当の。

アラタ お弁当の。

サエ 汁漏れしないようにしてるでしょ。こう…、上蓋のふちに。

アラタ ああ。

サエ あ！お弁当で思い出した。アラタ、ちよつと痩せたでしょ。
アラタ まあ、すこし。
サエ ダイエット？
アラタ 写真撮つてるとじかんわすれちゃって。結構食べてない日とかあるからかなあ。
サエ やっぱり。健康的な痩せ方じゃないわよそれ。
アラタ わかつてはいるんだけどね。コンビニのお弁当とか、食べる気しないし。
サエ よくないなあ。ちゃんと三食食べなさいって。
アラタ 家の近くに弁当屋でもあればなあ。ちゃんと食うんだけど。
サエ 弁当屋。
アラタ へ？
サエ わかった。私弁当屋になる。
アラタ ブリーダーは？
サエ あ、そうだ。え、ダブルワーク？
アラタ 聞かれても。
サエ 看板犬と一緒にお店やればいいのか！どうしよう、あまりの可愛さにきょうのわんことかの取材来るのよ。
アラタ 夢が広がるね。
サエ なに？
アラタ どうぞ、続けて。
サエ 看板メニューはやっぱりのり弁だよね。お弁当屋さんだから。
アラタ 楽しい？
サエ そりゃそうよ。絶対無理だから。
アラタ え？
サエ 私、料理できないし。
アラタ そうだね。
サエ そうなの。だからアラタはすごいよ。好きが上手なんだから。いいなあ。
アラタ ありがとう。
サエ どういたしまして。それより、
アラタ …うん。
サエ …おじさんとなんかあった？
アラタ …。
サエ ケンカするな。とは言わないけどさ。お葬式だよ、お母さんの。
アラタ ごめん。
サエ まあ、アラタだけじゃないけどね。
アラタ 何が。
サエ おじさんも、子供っぽいよね。何有ったかは知らないけどさ。ずっとむすつとしてるんだもの。大人なのに。
アラタ はは。
サエ さつきから私気使いっぱなしだったんだけど。
アラタ それはわかった。
サエ 言うことは。
アラタ ごめん。
サエ 許す。わたしは大人だからね。で？
アラタ 何があったのよ。
アラタ どこから話せばいいかな。

サエ、時計を見る。

サエ なに、そんな長くなる。

アラタ 聞いたってそれかよ。
サエ 冗談よ。で？
アラタ …カズラとき。
サエ カズラ君？
アラタ 見舞いに行ったんだよ、ちよつと前にだけど。
サエ うん。
アラタ 母さん、病室に帰ってこなかった日あつただろ、
サエ あつたねえ。
アラタ うん。
サエ お茶、もってこようか。
アラタ ファンタ。
サエ お茶ね。

サエ、捌け入れ替わりでビニール袋をがさがとさせてるカズラがやってくる。カズラはポケットからお供え用の小さなビールを出す。

カズラ おまたー。飲む？

場所は病院付近のベンチへと変わる。

アラタ さんきゅ。酒じゃねえか。
カズラ 酒だよ。もらったんだよ。
アラタ 誰から。
カズラ そのお地藏さんから。
アラタ 戻してきなさい。
カズラ でもこれいいよって。もらったんだもん。
アラタ 地藏がしゃべるかよ。
カズラ 地藏じゃなくて。
アラタ じゃあ誰だよ。
カズラ 地藏の隣に立ってたおじさん。
アラタ 怖いよ。誰だよ。
カズラ しらない。でもここ最近毎日たつてんだよね。で、毎日俺のことじーっと見てんの。
アラタ …。いいからそれ戻してこい。
カズラ なんだよ。せつかくもらってきたのに。

カズラ、カシユツ。グビ…。

アラタ ああ！
カズラ なんだよ。
アラタ 知らんからな。おれ知らんからな。
カズラ 大丈夫だって。ただのビールだし。
アラタ 見舞い前に酒あおつていく馬鹿がどこにいるんだよ。
カズラ 見舞い前に辛気臭い顔してっからさ。
アラタ 酒飲んではいけねえよ。
カズラ …元氣出せよ。モテないぞ。
アラタ 元氣でももてねえよ。
カズラ そうなんだよなあ。俺なんかこんなに元氣なのに。
アラタ はあ。
カズラ そんなんじやあおばさんの元氣吸い取っちゃまうぞ。お前の生命エネルギーをお見舞いしてやるんだろ？

アラタ そんな感じではないけど。
カズラ お見舞いなんだからこつちがシャキッとせんと。
アラタ この間さ、
カズラ おう。
アラタ カズラ、何て呼ばれた。
カズラ だれに？
アラタ 母さんに。
カズラ アラタの？
アラタ そう。
カズラ なんだっけ、アキヒトだか、アキラだか。
アラタ 病気だっけわかってるけどさ。忘れられるのって、つらくないか。
カズラ だからお見舞いに行くんじゃない？
アラタ え？
カズラ もしかしたら思い出してるかもしれないし。忘れられても何回もカズラですって言えばいい。つてかこないだの見舞いの時に散々否定したから。何言われても「あ、カズラなんですけどね。」って繰り返しまくったから。いける。今日の俺ならいける。
アラタ ポジティブだな。
カズラ ネガティブだな。
アラタ 怖いんだよ。忘れられるのが。
カズラ その時は、まあ、
アラタ なんだよ。
カズラ 俺が面白おかしくするから大丈夫だ。たぶん。
アラタ 大した自信だな。
カズラ 起きてない事心配してもしようがないからな。ほら、行くぞ。
アラタ おう。酒、飲み切って行けよ。

アラタ、カズラ捌けていく。クロスするように舞台には叔父と、ミキト。

叔父 それで、
ミキト はい、近々。
叔父 はあ。いいなあ。思い出すなあ。
ミキト 下井さんはなんて仰ったんですか？
叔父 何を。
ミキト じらさないでくださいよ。プロポーズ。奥様に。
叔父 てれるなあ。
ミキト いいじゃないですか。ほら、今なら奥様に聞かれることもないですし。
叔父 あれだよ。古い、古いプロポーズだからあんまり参考にはならないよ。
ミキト ああ。大丈夫です。参考にはしません。
叔父 え。
ミキト 時代が違うんで。
叔父 …絶対教えない。
ミキト いいじゃないですか、教えてくださいよ。
叔父 いやだね。絶対教えない。
ミキト 「毎日俺の味噌汁を作ってくれ。」
叔父 え？
ミキト じゃあ「俺と同じ墓に入ってくれ。」
叔父 当てようとしなないで。
ミキト あ。「月がきれいですね」とか。
叔父 ぜんつぶちがうから。
ミキト ちよつと僕にはとてもわからないなあ。きつと下井さんはセンスのある方だから僕には

とても当てられないだろうなあ。

叔父 そんな大したこと言ってないよ。

ミキト いやいや、下井さん夫婦を見ていればわかりますよ。きつと、奥様も旦那さんの言葉が胸に焼き付いて離れない。そんなしみる言葉だったんだろうなあ。

叔父 ；しようがないなあ。

ミキト ちよろいなあ。

叔父 「あなたと一緒の家で暮らしたら楽しいんだろうなあと思いました。もし、あなたも同じ気持ちなら、僕もうれしいです。どうか、僕と結婚してくださいませんか。」

カズラ、途中で入ってきている。

カズラ かつこいい。

叔父 カズラ君いらつしやい。

カズラ おじさん、俺それ、つかう。

叔父 いいよ。

アラタあとから来る。

アラタ 父さん、お疲れ。

叔父 おお。来た来た。着替えは。

アラタ カズラがもってる。

叔父 ごめんねえ。

カズラ いえいえ。で、おばさんは。

ミキト いまは散歩の時間なんですよ。

カズラ ああ。

アラタ そつか。じゃあ、帰ってくるまでは居るかな。

ミキト、何かを見て、

ミキト じゃあ、すみませんちよつと呼ばれたみたいなんです。

叔父 ああ、いいよ、ごめんね話し相手になってもらっちゃったみたいで。

ミキト いえ、いい話聞きました。では。

ミキト、早々に立ち去る。

カズラ おじさんものみます？

叔父 ありがとう。お酒じゃないの。だめだよ、車で来てるもの。って言うか院内飲酒禁止だよ。

カズラ おんなじこというんですよ。

アラタ 当たり前だろ。

カズラ 麦茶みたいなもんだよ。

二人 材料はな。

カズラ 親子出してくるなよ。

アラタ 出してないよ。

叔父 そうだ、清水さんわかるか？

アラタ ああ、向かいの。

叔父 一昨日会ってさ。

アラタ ここで？

叔父 そうそう。何事かと思ったら、娘さん子供生まれたんだって。

アラタ へえ。

叔父 これでおばあちゃんになったわー。つて。
アラタ 清水さんって、娘さん何て名前だっけ。
叔父 いやあ、それが思い出せないのよ。
アラタ 俺もだ。
カズラ カオリだよ。
アラタ そうそう！良く覚えてたな。
カズラ 小学校の頃片思いだったんだよ。
叔父 え。幾つ離れてる？
カズラ 向こうが10上
叔父 ませてるなあ。
カズラ 大人のおねえさんっていいよなあ。
アラタ それはわかる。
叔父 そんなもんか。

カズラ、ゆつくり二本目に手をかけている。

叔父 ゆつくり飲むんじゃない。
カズラ ばれた。
アラタ 昼間つから飲んでんじゃないよ。
カズラ なんか薄い気がするんだよな。やっぱお供え物って駄目だな。
叔父 お供え物取ってきたら駄目だよ。
カズラ あ、それさっきも言われた。
叔父 そりやいうよ。
カズラ そしたら家で飲みなおしてくるかな。
アラタ おう、帰れ帰れ。
カズラ 叔母さんに俺の写真見せておいて。

カズラ、小さい紙切れを渡す。

アラタ 証明写真じゃねえか。
カズラ 寝たら見えるように天井に張り付けておいて下に「カズラ」って書いといて。これでもう忘れねえだろ。
アラタ わかったわかった。
叔父 ごめんね、せっかく来てもらったのに。
カズラ いいんすよ。また来るんで。

カズラ、はけきる。

叔父 さてと。
アラタ 母さん、散歩には行けるんだね。
叔父 まあ、なあ。
アラタ どうしたの。
叔父 清水さんと会ったときな。
アラタ ああ、今度おばあちゃんになる。
叔父 そうそう。その時にな母さんも一緒に居ただけぞ。
アラタ おう。
叔父 誰だかわかってなかったみたいなんだわ。
アラタ 母さん？
叔父 そう。
アラタ 父さんも名前思い出せなかったじゃない。

叔父 いや、それとはな。

アラタ ちがうけどさ。

叔父 もしかしたら、忘れたり、するかもしれないから。

アラタ …覚悟はしておくよ。

叔父 うん。

アラタ カズラのことって。

叔父 思い出してないのかな。たぶん。

アラタ そっか。

叔父 うん。

アラタ 一応、これ貼っておくか。

叔父 天井に？怒られるよ。

アラタ だよな。あとこれ、

叔父 ん？

アラタ、レターケースのようなものを渡す。

アラタ この間、家の周りの写真見て喜んでいたら母さん。だから、今度は家の中、撮ってきた。

叔父 …ありがとうな、アラタ。

アラタ いいよ。母さんのためだ。

叔父 あのな、

ミキト急いで入ってくる。

ミキト 下井さん。

叔父 どうしました。

ミキト 奥様、散歩中にどこかに行ってしまったみたいで。

叔父 え。

ミキト ベンチで休んでる時にずっとどこかに行ってしまったみたいで。本当にすみません。

アラタ 今、スタッフで手分けして探していますので。

アラタ 俺も探してくるわ。どこですか。

ミキト すみません、休んでいたのは病院の目の前の時計の下にあるベンチなんです。

アラタ わかりました。

アラタ、電話をする、相手はカズラ。

アラタ カズラ？おう。まだ電車乗ってないか？あのさ、さっき待ち合わせした場所あるだろ？

そうそう。今いる？周りに母さんいないかな？いなくなっちゃって…。

会話の途中で

叔父 俺もいくか、

アラタ 父さんはここに居て、母さん戻ってきたときに誰もいないと不安でしょ。

叔父 そうか、

カズラへの電話の続き。

アラタ そしたらそこに居て、今した降りるから。うん。じゃあ。

叔父 …なんかあったら電話して、俺もするから。
わかった。

ミキト 本当にすみません。

アラタ、ミキト捌ける。その姿を見て自分の携帯電話を握りながら、舞台中央にある黒電話をじっと見つめる叔父。舞台中央から外れたところでカズラはきよるきよるとしている。

カズラ おばさん……。あ、すみません人違いでした。

さらに中央を挟むようにアラタは電話をしている。

アラタ うん、いないわ。ちよつと待ってかけなおす。

アラタです。すみません突然、母さんが病院からいなくなってしまつて。そう、そんなんです。ええ。何かあれば……。はい。

会話の途中でアラタとカズラは合流する。

アラタ いえ、どんな些細な事でも結構ですので。はい。

カズラ どうよ。

アラタ 駄目だ、ぜんっぜんだ。

カズラ 俺も、そんな遠くまでなんかいかないよな？

アラタ と、思うんだけどな。

カズラ サエさんに連絡した？

アラタ うん、ちよつとでなかった。

カズラ なんか買ってくる。何がいい。

アラタ フアンタ。

カズラ あいよ。

カズラ捌ける。と同時に電話がかかってくる。

アラタ あ、サエさん。

サエ ごめんねー。車運転してて気が付かなかったー。

アラタ ごめん、今大丈夫？

サエ 大丈夫、今帰ってきたとこだから。で？どうしたの。

アラタ 母さん、病院からいなくなっちゃつて。

サエ え、見つかつてないの？

アラタ うん。

サエ そっか、ちよつと私も探してみるね。

アラタ うん、なんかあったら教えて。

サエ わかつた……。ちよつと待って。

アラタ なに。

カズラ戻ってくる。

カズラ おまたせ。

サエ ねえ。おじさんどこにいる？

アラタ 病院で待ってるけど。

サエ アンタんち誰かいるわ。

アラタ え。

サエ ちよつと、おばさん帰ってきてるよ。

黒電話が鳴り響く。照明がそこに集まっている間にサエは消える。

叔父　もしもし。うん…。そうか、いや、帰ってきてない。うん。
ああ、わかったよ。うん。

叔父、電話を切る。と、夢の中に居る。

叔父　母さん…。

ユメ　おとうさん。

叔父　ユメ。

ユメ　どうしたの？

叔父　母さんどっか行っちゃったんだよ。

ユメ　また怒らせたんでしょ。

叔父　ちがうよ。

ユメ　お父さん。電話なってるよ。

ユメ捌け。電話の音が鳴る。

叔父　ありがとう。…ああ。

一言つぶやき、静寂の中携帯を落とす。止まる携帯の音。

叔父　ユメ…。父さん、駄目駄目だ。

叔父、携帯を拾い上げる。

叔父　あれ、もしもし。あ、割れてる。嘘だろう…角から行ったのかな。角から。

叔父、電話を借りようとその場を動く。ミキト出。

ミキト　下井さん。どうしました？

叔父　いや、携帯、電源落ちちゃって。見つかりましたか？

ミキト　はい、なんだかつながらなかったみたいで。

叔父　すいません。

ミキト　今、電話代りますね。

叔父　父さんだ。

電話口はカズラである。

カズラ　すいません、僕です。

叔父　カズラ君か、ごめんなあ。で、今どこ。

カズラ　家です。

叔父　家？

カズラ　アラタ実家です。ん？ちがうな。こういう時なんていえばいいんですかね。

叔父　まあ、大丈夫わかったよ。家まで戻ってたのかあ。どうやって…。

カズラ　タクシー使ったみたいです。運転手さんにお金払っておいたんであとでください。

叔父　お、おおう。うん。そうか。ごめんね。

カズラ　で、おばさん家に居るんですけど、

叔父　けど、

カズラ　ユメって人を探してて、家に入れてくれないんです。

叔父　…え。

カズラ　アラタはアラタで家に電話かけ続けてるんですけど…おばさん出てくれないみたいで。

おじさん、ユメってだれですか？とりあえずアラタに変わりますね。

叔父 うん、

アラタ とうさん、

叔父 すぐ行くから、な。

アラタ 大丈夫だよ、うん、待ってるから。

叔父 アラタ、

アラタ 大丈夫。大丈夫だから。

自宅の電話が弱くなっている。サエとアラタのみになり、舞台中央に集まる。アラタが電話を取ると、そこはまた自宅となっている。

アラタ はい。ああ。ご無沙汰してます。あ、父はいま、ええ。はい。伝えておきます。はい。

アラタ、電話を切る。

アラタ ミキトさんからだった。

サエ なんて？

アラタ あと少ししたら着きますって。

サエ ……そう。

アラタ どこまで話したっけ。

サエ 全部聞いたよ。

アラタ ……

アラタ、どっこいせと座る。

サエ まあ、ね。そうだったんだね。

アラタ 怖くなっちゃってさ。忘れられるのも、忘れるのも。

サエ うん。

アラタ 怒ってるとか、あきれるとかとも、違うんだ。悲しいけど、それもなんか違うんだよな。

サエ 悲しくないの？

アラタ 悲しいけど、

サエ けど。

アラタ ……カズラってさ。すごいじゃん。

サエ そう？

アラタ 忘れられても別に？ってさ。

サエ それは、

アラタ うん、いや、家族じゃないからさ。そうなんだろうけど。

サエ 覚悟してたんでしょ。

アラタ 甘かったね。

サエ ……うん。

アラタ ユメって人探してさ、母さん、俺だよって言っても、ぜんっぜんこっち見てくれなくて。

サエ アラタ。

アラタ 父さんに向かって走り出してさ、ユメが、ユメがって。

サエ ……

アラタ なんかなあ。きつかった。はは。

サエ うん。

アラタ そりゃ…見舞いとか、行きにくくなるよね。どうする？行って、「誰？」って言われたら…泣いちゃうよ。

サエ うん。

アラタ 怒っちゃうかもわからないよね。「なんで覚えてないんだよ！」息子だぞ！義理の！つて。

サエ アラタ、

アラタ 事実だから。養子だから。俺。

サエ : 叔父さんには言わないのよ。

アラタ いえないよ。

サエ えらい。

アラタ 俺、出来た息子だから。

サエ そうね。

アラタ こんな息子ほしいだろ。

サエ うーん。弟ならほしいかな。

アラタ やった。

サエ おじさんも、おばさんもアラタのことずっと心配してたし。それは間違いないし。家族

アラタ だって、思ってたと思うよ。

サエ : 俺だってそうだと思うてるよ。

サエ じゃあ。

アラタ だからこそさ、忘れられたときに…。

サエ あのね、アラタが最初に来た時に私、アラタになんていったか覚えてる？

アラタ : ぜんっぜん。

サエ なーんだ覚えてないんじゃない。

アラタ それとこれとはさ。

サエ 「こんな子知らない。この家はユメの家だ。」

アラタ ユメ…。

サエ そのあとお父さんに思いっきりげんこつはられたけど。

アラタ サエさん、ユメって人知ってるの？

サエ 知ってるよ。すごく。すっごく知ってる。

アラタ 誰？

サエ 娘だよ。叔父さんの。

サエを残して子供たち登場。

メグミ やめるよ。やめるよ。

トマリ ほら、好きなんだろ。告っちゃえよお。

メグミ ちがうよ。ちがうって言うてんじゃないの。

サエ うるさいよ。

トマリ うわ、サエだ。

サエ うわって何よ。

トマリ ユメはまだ？

サエ そろそろ帰ってくると思う。

ユメ登場、

ユメ お待たせ。

トマリ おせえよ。

サエ アンタらも今来たじゃない。

メグミ らって、僕なにも言っていないじゃない。

サエ アンタたちはセットでうるさい。

メグミ ひどいよ…。

トマリ いちいち泣くなよ。

メグミ 泣いてないよ。

トマリ 泣けよ。
メグミ なんてだよ。
ユメ はい、サエ。

ユメ、小さな手紙を渡す。

サエ ありがとう！
トマリ 何それ。
サエ 手紙。
トマリ 女子かよ。
メグミ 女子だよ。
サエ なに？トマリも書く？
トマリ 書かないよ。

若かりし頃の叔父、登場。

叔父 いらつしやい。
全員 お邪魔します。
叔父 じゃあ、ユメ、留守番頼むな。
ユメ うん。いってらつしやい。
おとうさん。

叔父 行ってきまーす。

叔父、捌ける。

トマリ メグミ、宿題うつさせて。
メグミ うん、いいよ。
トマリ さんきゅ。
サエ ちよつと、ちゃんと自分でやんなさいよ。トマリ。
トマリ 良いんだよ、メグミが見せてくれるんだから。
サエ ちよつとメグミ。
メグミ 見せなかつたらぜつたいパンチしてくるんだもん。
サエ ちよつとは抵抗しなさいよ。
メグミ 嫌。無駄な抵抗はしない。痛い嫌だもん。
トマリ なー。
サエ バカな男子はモテないぞ。
トマリ 別にモテなくてもいいもん？
メグミ いや、僕はモテたいから自分で勉強するよ。
トマリ そこはうん。つて言えよ。
サエ ユメもなんか言ってるよ。
ユメ バカは嫌だよ。
トマリ …。
ユメ ね。
サエ ね。で？
トマリ メグミ、ノート返すね。
メグミ いいの？宿題、
トマリ おん、自分でもできるし。
メグミ ふうん。
トマリ なんだよ。

ユメ ベつにー。ねー、
サエ ねー。
メグミ ちよろい。
トマリ なに。
メグミ 何でもない。ユメちゃんこれ、お返事。

メグミ、ユメに手紙を渡す。

ユメ ありがとう。あした返すね。
メグミ うん。
トマリ メグミ。お前。
メグミ なに？
トマリ …なんでもない。
メグミ トマリにも書いてきたよ。はい。
トマリ え。いや、
メグミ いらなの？
トマリ いるよ。

ユメ、小さな手紙をトマリに渡す。

ユメ はい、これ。
トマリ なんだよ。返事書かなきやいけないのかあ。
ユメ べつに書かなくてもいいよ。
トマリ え。いや、書くよ。

トマリ、勉強道具をよけてノートを破り手紙の返事を書きだす。

サエ 家で書きなよ。
ユメ 字きたない。
トマリ なんてそういうこと言うの。
メグミ 泣くなよ。
トマリ 泣いてねえよ。
ユメ 字まちがえてる。
トマリ ぐう…。
メグミ 泣くなよ…。
トマリ 泣いてないよ…。
サエ ちよつと、ユメ。
ユメ ごめんごめん。
トマリ 泣いてないから別にー。
ユメ だって。
メグミ つよがっちゃって。
トマリ なんか言ったか？
メグミ はい！これ！
トマリ なにこれ。
メグミ これに折って。手紙入れるの。
トマリ いいの？
メグミ うん。あげる。
トマリ さんきゅー。
サエ 私もほしい。
メグミ そしたら、このピンクの奴。

サエ いいの？
メグミ いいよ！

ちりーんと音が鳴り、郵便屋さんが来る。

郵便 ごめんくださいーい。

ユメ 誰だろう…？

メグミ さあ。

郵便 だれかいませんかー？

サエ 駄目だよ、留守番してる時は知らない人来ても出たら。

トマリ馬鹿でかいくしゃみ。

ユメ てめえ。

トマリ ちがうちがう。わざとじゃない。

ユメ 静かに。

トマリ …すいませんでした。

郵便 なんか…聞こえた。

ユメ ほらあ。

トマリ くしゃみだもん。我慢してたんだけどむりだったんだもん。

サエ 鼻とれよ。

メグミ 使えない鼻だな。

トマリ メグミお前後でパンチ。

メグミ 暴力ふるう男はモテますか？

サエ うるさい。

ユメ 静かにしてって。

郵便の人、子供たちの背中側から窓を開け入ってくるモーション

郵便 からからから。居るじゃない。

トマリ ひいいい。

ユメ あ、郵便屋さん。

郵便 ごめんね、さっき渡し忘れたお手紙あったから。お父さんに渡しておいてください。

ユメ はい。わかりました。

郵便 居るならでてくれないとお。

ユメ 留守番してる時は出ちゃダメってお父さんに。

郵便 ほお！えらいねえ。

郵便の人鞆の中から、飴玉を出して配る。

郵便 お勉強終わったら食べてね。おいしいやつだから。

トマリのお手紙を見た郵便の人。

郵便 お。

トマリの手から手紙を取り上げる。

トマリ ああ、それはあの。

郵便 お手紙か、関心関心。えーとユメちゃんあてだね。はい。

消印のスタンプを押して。郵便の人は手渡す。

ユメ ありがとうございます。

郵便 いえいえ。どういたしまして。じゃあ、おじさんは帰るから。窓。ちゃんと鍵かけてお
くんだよ。

ユメ はい。

郵便の人帰っていく。窓を閉めてユメが鍵を閉めたのを指さし確認して帰っていく。

トマリ 怖かった。

メグミ いいなあ。

トマリ 何が？

メグミ 郵便屋さんにお手紙届けてもらったじゃん。

ユメ 見て。これ。本物のお手紙。

メグミ いいなあ。

トマリ そう？そうだろ。

ユメ トマリ、

トマリ なに。

ユメ ありがとう。

トマリ うん、まあ。

サエ いいな…。

メグミ 今度みんなで本当のお手紙出そうよ。

ユメ どうやって？

メグミ 切手買って、ポストに入れて。

サエ それで届くの？

メグミ うん。ちゃんと住所書いて。

サエ いいね。やろうよ。

メグミ じゃあ、みんなの住所教えて！

トマリ うん。

メグミ じゃあ、トマリから。

叔父、帰ってくる。

叔父 ただいまー。

ユメ お帰りなさい。郵便届いてた。

叔父 ありがとー。あら、みんなまだいたの？

メグミ あ、帰らなきゃ、トマリ早く。

トマリ あ、待って

メグミ お邪魔しました！

叔父 気を付けるんだよ。

トマリ まって、お邪魔しました！

叔父 はい。

トマリ、メグミ捌け。

ユメ 見てこれ。

叔父 手紙？

ユメ そこじやなくてコレ。
叔父 消印だ。
ユメ 本物のお手紙みたいでしょ。
叔父 へえ。よかったな。
ユメ うん。いいでしょ。

叔父、ユメの頭をなでる。

ユメ ちよつと。やめて。
叔父 いいじゃないか、親子のスキンシップ。
ユメ サエ居るところではやめて。
叔父 …はーい。
サエ 気にしないよ。
ユメ 私がやなの。

叔父、ふてくされている。ユメ、カンの箱に仕舞う。

ユメ みてー。
サエ すごいたくさん。
ユメ これ、サエからのだよ。
サエ あ。ピンクの奴だ。
ユメ ピンク好き？
サエ すき。オレンジっぽいやつが特に。
ユメ 私も。お父さん。今度みんなの手紙出すから、切手ほしい。
叔父 ああーどつかにあつたな。チョット待ってな。
ユメ 早く早く。
サエ お邪魔しましたー。
叔父 はい、またね。
ユメ また来週！
サエ うん！またね！

メグミが現れ、翌週となる。

メグミ お待たせ。
サエ あれ、ユメは？
メグミ 先帰ったけど。来てない？
サエ うん。と、トマリは？
メグミ トマリは先生につかまって怒られてる。宿題3回目だから。
サエ そっかあ。
メグミ ねえ。手紙出した？
サエ 昨日出した。
メグミ 僕、まだー。

メグミ、ポケットから手紙を出す。

サエ 誰に出すの？
メグミ トマリ。
サエ なんで？
メグミ トマリは届いてからじゃないと書かなそうだから。
サエ でも、トマリも昨日出したって言ってたよ。

メグミ え？そうなの？誰に？
サエ 教えてくれなかった。
メグミ ふうん…。
サエ なに。にやにや。
メグミ トマリってき。絶対ユメちゃんのこと好きだよね。あれ。
サエ そうなの？
メグミ え？違うの？
サエ 私、そういうのわかんないから。
メグミ ずっとそうなんだと思ってた。
サエ へえ…。
メグミ だから絶対ユメちゃんに出してると思う。
サエ ふーん。
メグミ サエちゃんはさ誰に手紙出したの？
サエ ユメ。
メグミ へえ…。ん？
サエ なに？
メグミ いや。アレ？
サエ 何よ。
メグミ 僕はトマリに出して、サエちゃんと、トマリはユメちゃんに出したんだよね。
サエ そうと決まったわけじゃないけど。
メグミ あれ？僕は？
サエ …ユメが出してるかもしれないじゃない？
メグミ ユメちゃんは絶対サエちゃんに出してるもの。
サエ だろうね。
メグミ はあ…。
サエ ほら、また今度やればいいじゃない！ね！
メグミ …サエちゃんてさ、優しいね。
サエ うん。優しいよ。
メグミ サエちゃん、好きな人っていますか？
サエ 居ない。
メグミ …そうなんだ。
サエ おそいなあ、ユメ…。
メグミ あのさ、もし
サエ あ、おじさん。

叔父登場。

叔父 あれ？ユメは？
サエ わかんない、まだ来てないの。
叔父 そう。とりあえず家で待ってなさい。
サエ はい。
叔父 メグミ君もほら、
メグミ お邪魔します。
叔父 はい、ゆつくりしてってね。今お茶出すから。
サエ お構いなく。
叔父 おっ。大人—。
サエ へへ—。
叔父 じゃあ要らないね。
サエ のど乾きました。
叔父 はいはい。

叔父、奥の方へ。

サエ で？

メグミ なに？

サエ さっきなんか話してたじゃん。

メグミ ああ…。忘れちゃったね。

サエ そう？

メグミ ユメちゃんおそいなー。

サエ 思い出した。

メグミ え？

サエ 好きな人の話。

メグミ ああ。うん。

サエ 私居た。好きな人。

メグミ ふっう忘れる？

サエ だって忘れてたんだもん。好きな人間かれたらこう答えようってユメと約束してたの。

メグミ だれ？

サエ ユメ。

メグミ …え。

サエ 二人でそうやって答えてれば逃げれるよねって。

メグミ 逃げるって何から。

サエ 女子から。

メグミ サエちゃんだつて女子でしょ。

サエ クラスでさきやーきやー言うじゃん。だれだれが誰のこと好きなんだつてーって。

メグミ いるね。

サエ うるさいから嫌い。

メグミ 結構いうね。

サエ 誰が誰好きでもいいじゃんって。思うんだけどどう？だから、メグミも誰かに聞かれ

たら、「トマリが好き」って言っとけばいいんだよ。

メグミ …どうだろう。

サエ え？なんで？嫌い？

メグミ 友達としては好きだけど、その好きじゃないから。

サエ 私もユメのことは友達として好きただだよ。

メグミ それはわかってるけどさ。

サエ メグミのことも好きよ。

メグミ うん。僕も。

サエ それでいいじゃん。

メグミ …僕、サエちゃんにも書くね。

サエ じゃあ、私もメグミに書くね。

メグミ うん。

トマリ 登場

トマリ お邪魔しまーす。

サエ あ！きた！

トマリ すげえおまわりさんいた。

サエ どこ？

トマリ 郵便局の目の前の信号。

サエ 遠回りしてるじゃん。

トマリ だってパトカー見えたんだもん。

メグミ なに寄り道してんだよ。
トマリ あ！そうだ。なんでおいてくんだよ。
メグミ え？なんで。待つなんて言っていないよ。
トマリ 俺とお前の仲じゃん。
メグミ 勝手に先生に怒られてただけだろう。
トマリ お前が宿題写させてくれないからだろう。
メグミ 自分でできるって言ったじゃない…。
トマリ 出来るわけないじゃない…、
メグミ ば…。なんでも、
トマリ バカって言った。
メグミ 言っていないよ、言っていないよ。
サエ ねえ。
メグミ なになに。
トマリ おい！
サエ ユメは？
トマリ え？居ないの？
サエ まだ。
トマリ メグミより先に帰ったろ。
メグミ うん。
叔父 まあ、そのうち帰ってくるよ。
サエ ちよつと迎えに行ってくる。
トマリ あ、俺も。
メグミ ちよつと待ってよー。

鳴る、黒電話。アラタ、出てくる。

サエ お邪魔しましたー。
叔父 はいはい。

みんな捌け。

叔父 はいはいはい。はい、下井です。え。ええ、そうです。ユメの父です。
…。はい。ええ。わかりました。すぐ向かいます。はい。

叔父、その場にへたり込む。入れ替わりでサエ達が入ってくる。サエの手にはちいさな手紙がある。

サエ おじさん、
叔父 ああ。サエちゃん、みんないらっしやい。
サエ これ、みんなで書いたの。
叔父 ああ、ありがとう。ユメも喜ぶと思うよ。
サエ じゃあ、
叔父 うん。ありがとうね。

叔父、みんなから手紙をもらい、黄色い箱にしまい捌けてゆく。
アラタはそれを見ている。

メグミ ユメちゃん、天国に行けたかな。

トマリ、メグミを突き飛ばす。

メグミ なにするんだよ。
トマリ うるさい馬鹿。
メグミ バカって、なんで。
トマリ うるさい。馬鹿なんだよ。お前は馬鹿なんだ。それだけ。
メグミ もう宿題見せてやんないからな。

サエ 会話の間に現代に戻ってきている。

メグミ もう先生に怒られても助けてやらないからな！

トマリ 別にいいよ。

メグミ おい。

サエ ユメ、居なくなったら、

トマリ なんだよ。

メグミ 怒ってるよ。

トマリ 何が。

メグミ ユメちゃん。

サエ ばらばらになっちゃった。

トマリ、メグミを突き飛ばす。そのまま捌けてゆく。

メグミ あ…。トマリ、違うんだ。ねえ、トマリってば！

二人がいなくなり、アラタがゆっくりと畳に座る。明かりがゆっくりと現在にもどる。

サエ 家に帰ったら、お母さんが「ユメちゃん、事故に遭った。」って。

学校もちよっとお休みになって。みんなでお手紙書いて、おじさんの所に持って行ったの。

アラタ …。

サエ おじさん、すごく、気落ちしてね。おばさんも。ユメが死んじゃってから、ずーっと。

そこに、アラタが来たんだ。お父さんとお母さんが亡くなったから、この子のお父さんとお母さんになるのって、おばさんに紹介されたの。だから、私。怒ったの。ここは、「ユメの家だ。」って。

でもね、そんなの私、忘れちゃうくらい…。いや、アラタが、本当にこの家の子なんだなって。あれ？もしかして私の弟なんじゃないかなって。そう、

叔父、入ってくる。

叔父 サエちゃん。

アラタ …僕だけ。

サエ え？

アラタ …僕だけ知らなかったんだ。

サエ アラタ。

アラタ 僕だけ知らなくて、お父さんってお母さんって呼んで。そうだって信じ込んで。

家族だって思い込んで、一人で心配して、怒って、笑って。なんだよそれ。

サエ ちがうよ、

アラタ 母さんも、僕のこと忘れてたのに、本当の娘のことはしっかり覚えてたじゃないか。

サエ 何度も何度も何度も呼んで探してたじゃないか。
ちがうんだって。

アラタ 何が違うんだよ。

サエ 何もかも。

アラタ じゃあなんで黙ってたんだよ。そんな、そんな大切な事。俺だけ何も知らないで。勝手に、落ち込んで。

サエ だから。

アラタ 何が家族だよ、俺は死んだ娘の代わりじゃないか。

サエ ちがうって。なんで。

アラタ 母さん、別に俺のこと待ってないじゃないか。この手紙だって。

アラタ、ミキトからもらった手紙を破り捨てる。

叔父 ……。

アラタ 俺にじゃない、きっと、娘さんに書いてあげた、最後の手紙だ。

サエ 何てことするのよ。お母さんの手紙でしょ。

アラタ 母さんじゃないよ。俺の本当の母さんと父さんは死んだんだ。俺が小さいときに。もう忘れちゃったけど。

サエ アラタ、あんた今までどれだけ世話になったと思ってるのよ。

アラタ サエさんには関係ないだろ！家族でも、なんでもない。

アラタ、どこかへ行ってしまう。カズラとすれ違う。サエは、破かれた手紙を拾い上げてゼロハンテープでつなげようとしている。

カズラ あの、

叔父 ごめんね。

カズラ いや、なにがなんだか…。

叔父、手紙を拾い、机の上へ。そこから少し離れて座る。

その手紙を、サエはバラバラにならないように寄せておく。

サエ なんで、こんなことするのよ。信じられない。

カズラ アラタは…。

叔父 いや、まあ。

カズラ ……追いかけた方が良いですかね？

サエ 知らない。

カズラ ええ。

サエ もう知らない。

サエは手紙をきれいに伸ばして、折り畳み、机の上へ置く。

カズラ いや、だって、

叔父 大丈夫だから、心配しなくても…、

カズラ ……。

叔父、何も言えずその場にとどまる。

カズラ わあ、手紙真つ二つ。

カズラ、手紙を触る。サエ、それを奪うように。

サエ 触らないで。
カズラ あ。

カズラはその勢いで、そのままサエの真隣りに座る。

カズラ 失礼します…。

サエ ごめんね。

カズラ いえ。

サエ 近い。

カズラ ごめんなさい。

サエ ……。

カズラ ホントにすいません。

サエ ……こんなつもりじゃなかったのに。

叔父 ごめんね、サエちゃん。

サエ アラタに知ってほしかっただけなのに。

叔父 俺が悪いんだ、

サエ おじさんは何も。

叔父 いや、いや。うん。全部俺が悪いんだ。ユメも、母さんもアラタも。はあ…。

カズラ 溜息、もったいないですよ。

叔父、一人で深くため息をつく。カズラ、近くにアラタの携帯と財布を発見して懐に仕舞う。

カズラ 俺、アラタみてきますから。

サエ いいよ。別に。

カズラ そんな、

サエ どうせしばらくしたら帰ってくるよ。

カズラ ……帰ってこなかったら嫌なんです。

サエ 大丈夫だから。

カズラ それ、俺が決めるんで。

カズラ 捌ける。

サエ ごめんなさい。

叔父 サエちゃん。

サエ はい。

叔父 言わないでほしかったな。

サエ ……ごめんなさい。

叔父 ……ごめんね。

サエ、一度たたんだ手紙を便箋にしまいなおしながら。

サエ なんだか、ムキになっちゃって。ごめんなさい。アラタ、子供なんだもん。自分だけ、自分だけって。叔父さんにも、あんなこと言っ

叔父 言えなかったんだ、

サエ おじさんのせいじゃないです。

叔父 ……そうかな。

サエ たぶん。

叔父 たぶん、か。

サエ、立ち上がり。

叔父 サエちゃん。

サエ ……お手洗い。

叔父 ……あ。

サエ、すたすたと捌けてゆく。

叔父 ユメ…。ごめんな。父さん駄目駄目だ。

ユメ入ってくる、過去へと。

ユメ デート、行くんじゃなかったの？お母さんと。
叔父 はい…。

ユメ お母さんどーこだ。

叔父 教えてください。

ユメ お母さん何回も起こしてたのに。

叔父 眠気が勝ちました。

ユメ 「私一人で「一人で」行くからね！いいの！」

叔父 一人で行ったの？

ユメ うん。お父さん覚えてないだろうけど。

叔父 全く覚えてない。

ユメ 「うーん。一人でいってこーい。」って。

叔父 言ってた？

ユメ 割とはつきり。

叔父 駄目駄目だあ。

ユメ そうだねー。めちやくちやに怒ってた。

叔父 そりやそうだよ。

ユメ 「おとうさんなんでこんな大事な事忘れちゃうのかなあ。そっか、私なんて別に大事じ

やないのか。ははは。」

叔父 って？

ユメ うん。言ってたよお母さん。

叔父 ちがうんだよ。

ユメ ちがわない。

叔父 いや、ちがくて。

ユメ ちがくないよ。忘れてたんですよ。

叔父 はい。

ユメ お母さん、デート楽しみにしてたよ。

叔父 うん。

ユメ 「明日はお父さんとデートだから、ユメお留守番できるー？」ってウキウキだったのに。

叔父 うん…。

ユメ 反省。

叔父 ……したよ。

ユメ じゃあ、これ。

ユメ、手紙を一通見せる。

叔父 母さんから？

ユメ うん。

叔父 はい。

ユメ 「お父さんへ。ゆっくり眠れましたか？」

叔父 はい。

ユメ 「起きたら支度をしてください。玄関で待ってます。母より。」

叔父 え？

ユメ 早く行ったら。

叔父 もお、母さん。

ユメ あ、お母さんにちゃんというんだよ。

叔父 え？

ユメ ごめんなさいって。

叔父 ちよつと。

ユメ 捌ける。

叔父 ユメ。

黒電話が鳴る。現実に戻される叔父。

叔父 はい。ああ。おひさしぶりです。え？アラタ。ああ、ちよつと出てまして…。

ええ。はい。まあ、ね。妻も最後は…。はい。いえ、そんな、遠いですからね。

ええ。また。はい。あ。事前にお電話いただければはい。家には居るようにしますから。

…広くなりましたねえまた…。

大丈夫です。ええ。すみませんご丁寧に。ええ。はい。はい。

叔父、電話を切る。

叔父 広いなあ。広くなったなあ…。

ミキト登場。

ミキト ごめんください。

叔父 ミキト君。来る前に電話…

ミキト あれ？しましたよ。アラタ君に伝えただけだな。

叔父 ああ、そっか。ごめんね、忘れてたよ。

叔父、ミキトを連れて家の中へ行くモーション。と同時に場転。
場所は大きく変わりカズラ。

カズラ いないなあ。

カズラ、一人で探している。

カズラ お？後姿そっくり。アラタ。じゃない。すごい似てますね。いえ、ひとちがいでした。
すいません。良いお散歩を。ははは。

電話が鳴る、

カズラ はい、アラタの携帯です。

サエ、登場。

サエ ねえ。

カズラ アレ、声が二重に聞こえる。あれ？俺の声も聞こえる。

サエ なんでカズラ君が持つてるの。

カズラ だって、置きっぱなしになってたから。

サエ もおー！

カズラ なになになに。

サエ ……何でもない。

カズラ サエさん、アラタ行きそうな場所とか知りませんか？

サエ ……知らない。

カズラ いやーか所くらい。

サエ 知らない。

カズラ いや、

サエ 知らないってば。カズラ君はアラタの友達でしょ。それぐらいわかるでしょ。

カズラ なんですか、それ。

サエ アラタのことなんて知らない。

カズラ サエさん、大好きですよ。

サエ ……それが？

カズラ 車で仕事行きますよね。

サエ そうだね。

カズラ 料理できないんですよ。

サエ だから何よ。できなくても何とかなるもん。

カズラ 全部アラタから聞いたんで。

サエ ……

カズラ アラタは、サエさんのこと知ってますよ。家族だからって。

サエ いや、

カズラ 俺、アラタのこと知ってますよ。写真好きで、仕事にしちゃって。お母さん病気だから、

風景の写真撮って見舞いに行って。

サエ それとこれとは違うじゃない。

カズラ そう、違うんですよ。で、友達なんだから。それくらいわかりなさいよ。って。

サエ それは

カズラ しらないって言いながら電話かけて、探しに来てくれたじゃないですか。こーうやって。

サエ ……

カズラ 面白くない事嫌いなんです。面白おかしくないよ。いやなんですよ。

サエ ごめんなさい。

カズラ 俺もすみません、アラタのこと知ってるはずなのに、どこにいるかわからなくて…。

サエ アイツ面倒な事嫌いだから意外と近いところにいると思っただけになあ。

サエ ……探してほしくないのかな。

カズラ サエさん。

サエ だって、カメラも携帯電話も置きっぱなしにしてさ。

カズラ まあまあ。

サエ どうしてあんなこと言っちゃったんだろう。ああ…もう。

カズラ 大丈夫ですって。

サエ カズラ君の言ったとおりだよ。もし、戻ってこなかったらって考えたら、子供じゃない

カズラ んだから、どこにでも行けちゃう。もしかしたらもう帰ってこないかもしれない。

カズラ 大丈夫ですって。

サエ きつと見つかるから？どうしてそんなこと言えるの。

カズラ あいつ財布も置いてるから。

カズラ、財布を取り出す。

カズラ だから、足で行けるとこって限界あるんですよ。だから大丈夫。絶対見つかります。

カズラ、サエ捌けていく。舞台は家に戻る。

叔父 ごめんね、バタバタしてて。

ミキト こちらこそ、遅くなってしまつて。

叔父 で、

ミキト これが書類ですね。

叔父 ああ、こんなにあるんだね。で、

ミキト ああ。

ミキト紙袋から、カンの箱を出す。

ミキト こちらですネ。

叔父 うん。ごめんねえ。

ミキト いえいえ、僕たちも見逃してしまつて。

叔父 どこにあつたのかな。

ミキト ベッドと壁の隙間にすっぽりとはまっています。すみません。何が入ってるんです？

叔父 手紙だよ。

ミキト 手紙。

叔父 実はね、娘がいたんだ。

ミキト …はい。

叔父 エメつて。母さんに似てたな。

ミキト はあ。

叔父 亡くなったんだけどね。

ミキト …。

叔父 まだ、小さいときに。

ミキト え。

叔父 娘にみんなが書いてくれた手紙なんだよ。これは。

ミキト お守り、

叔父 いや、いやいや。ちがうよ。

ミキト そうですか。

叔父 ミキト君。

ミキト はい。

叔父 君は、大切な人が突然いなくなったらどうする。

ミキト …。

叔父 僕はね、何もしなかったんだ。できなかったし。

妻は、いろいろ趣味を増やしたり、働きに出たり。私は、何もしてやれなかったんだよ。

娘にも、妻にも。

ミキト …それは、違うと思います。

叔父 ありがとうございます。

ミキト いえ、本当に違ふんです。だって、奥様が僕に話してくれた下井さんの話は全部楽しかった思い出話でしたから。

叔父 …。

叔父 本当に、楽しそうに話していらして、だから羨ましかったです。下井さんが。

叔父 僕が。

ミキト 大切な人にそう思ってもらえる、いい男に、なれたらな。と。

叔父 てれるなあ。

ミキト 本心です。

叔父 ありがとうございます。

叔父 …。

叔父 …。

ミキト 本心なんですよ。
叔父 …。

ミキト こんなときにあれですけど。

ミキト、自身の結婚式の招待状を渡す。

叔父 ほんとうに、こんな時にあれだね。
ミキト すみません。奥様にも見せたくて。

叔父 …線香あげてくれるかい。

ミキト はい、ありがとうございます。

叔父、ミキト、捌けていく。手紙の残りは残したまま。蓋が少し開いている。
そこに、ユメが一人が入ってくる。過去の家となる。

ユメ たまった。たまった。

サエ お手紙箱？

ユメ うん。

サエ 今日は誰の？

ユメ お母さんからと、トマリから。

サエ トマリ？みせて。

ユメ いいよ。

サエ 「昨日の晩御飯は野菜が多かったから今日の晩御飯は肉がいいです。」…え？日記じゃ
ん。なんて返したの？

ユメ お母さんに言えよって。

サエ だよねえ。

ユメ ねえ。お手紙出した？

サエ 明日だすの。

ユメ そっかあ。

サエ どうしたの？

ユメ 思ったよりたくさん書いたから。明日間に合わない…。

サエ えー。楽しみにしてたのにー。

ユメ 一日待ってね。

サエ はーい。早く明後日にならないかなー。

ユメ 待ってって言ってるじゃん。

サエ まちまーす。

ユメ、お手紙の箱を置いて捌ける。

サエ 待つよー…。待ってるよ。お手紙。

サエ、別の場所へ移動。

サエ ユメ…。

トマリ登場。

サエ あ。

トマリ …。

トマリ、振り返ろうとする。

サエ トマリ。
トマリ なんだよ。
サエ メグミに謝ったの？
トマリ なんて。
サエ 押した。
トマリ だって、
サエ だってじゃないよ。
トマリ あいつが謝るまで謝らない。
サエ ユメ怒ってるよ。
トマリ サエも馬鹿だ。
サエ なんてよ。
トマリ わかるわけないだろ。ユメ死んだんだぞ。
サエ ……
トマリ ……
サエ でも、喧嘩したくない。
トマリ 俺だって…。
サエ じゃあ。
トマリ でも、みんな、怒ってる。
サエ そうだね。
トマリ メグミも。
サエ 怒ってなかったよ。
トマリ え。
サエ メグミ怒ってなかったよ。謝らなきゃって、泣いてたよ。
トマリ ……
サエ ……
トマリ ……
サエ ……
トマリ ……
サエ ……

トマリ、捌けてく。

サエ トマリ…。

明かりが変わり、カズラが入ってくる。

カズラ 何休んでるんすか。
サエ いや、思い出してたんだ。昔のこと。昔ね、すごい喧嘩してたんだ。友達が…どうやって仲直りしたんだっけって。
カズラ 喧嘩なんて、したことないな。
サエ ほんと？
カズラ 僕すぐ謝っちゃうんで。
サエ 男らしくないなあ。
カズラ 自分が悪くなって思ったらすぐ謝るんですよ。悪くないときは謝らない。
サエ そうだよね…。
カズラ ちゃんとごめんなさいって言わなきゃダメなんですよ。俺はそうやって生きてきました。
サエ 大人だね。
カズラ かつこいいですかね？
サエ さあ。
カズラ ……で、なんでアラタと喧嘩したんですか。
サエ 忘れちゃった。

カズラ ついさつきでしょ。

サエ …アラタって子供っぽいじゃない？

カズラ そうっすかね。結構老けると思いますよ。

サエ そうじゃなくて。頑固というか、なんというか。

カズラ まあ。

サエ 何かあったら、「僕だけ、僕だけ、ああなんで僕だけ。」

カズラ 悪意がすごいもの。

サエ …それがね、すごく腹立ったの。

カズラ …。

サエ おかしくない？自分が一番かわいそう！みたいな。

カズラ じゃあ、誰が一番かわいそうなんですか？

サエ そりゃ…誰だろう。

カズラ 誰なんですかね。

サエ でも。兎に角、自分がいちばんかわいそーってなってるアラタが、腹立ったの。

カズラ かわいそうに見えましたよ。

サエ アラタが？

カズラ 実際、飛び出して行っちゃったじゃないですか。怒って。

サエ …。

カズラ 少なくとも、飛び出したくなるくらい。つらかったんだろうなあって思いますけどね。

サエ 俺は。

サエ 優しいね。

カズラ あと、友達だし。

サエ そっか。

カズラ 俺はアラタの味方で居たいんで。

サエ 男の友情？

カズラ はい。アイツはいいやつなんです。

サエ それは知ってるよ。

カズラ そんないいやつが、飛び出しちゃうくらいに怒ってたんですよ。

サエ …。

カズラ でもサエさんが良い人なのも知ってるんで。

サエ そんなことないよ。

カズラ いや、いい人ですよ。

サエ いい人は、あんなこと言わないよ。

カズラ …。

サエ 時間が巻き戻るなら、あんなこと言わなかったのになあ…。

郵便の人登場と同時に後ろでアラタがうろろう。

郵便 あ、どうもー。

サエ どうも。

郵便 どうしたのこんなところで。珍しいね。デート。

カズラ え。ええ。まあ。

サエ ちがいます。人探しです。

郵便 人探し？だれだれ？おじさんそういうの好きだよ。

サエ アラタ、どっかいつちやって。

アラタ 財布ないなあ…。

カズラ みてないっすよね。

郵便 みたよ？

二人 え？
郵便 見たって言うか、
カズラ どこに居たんですか？
サエ 教えてください。
郵便 なになに。
カズラ 早く。

アラタ あれ？携帯もない！

郵便 家。

カズラ いえ。

郵便 家。

サエ どのの？

郵便 どののって。ご自宅。

サエ 帰ってたのかな？

郵便 わからないけど、ふつうに家に居たように見えたけど。

カズラ 見間違いないですか？

郵便 そうだったらごめんね。

アラタ、黒電話で電話を掛ける。

カズラ ゆるさない。

郵便 ええ…。

カズラがもっていた携帯が鳴る。

カズラ あ、おじさん？

アラタ カズラ？なんで俺の携帯持ってたんだよ。

カズラ アラタ！お前今どこにいるんだよ！

アラタ 家に居るよ！

カズラ え？

アラタ なあ、まさかとは思うけど俺の財布も持ってないか？

カズラ ……持ってる。

アラタ なんてだよ…。

カズラ いや、だっつてすごい勢いだったから。てっきり外に行っちゃったのかと思って。

アラタ ……ごめんな。

カズラ いや、いいよ。じゃあ、今から戻るから。

サエ え。家？

カズラ、うん。と合図。サエほつとしたような。しないような。

アラタ サエさんもいるの？

カズラ うん。

アラタ そう。

カズラ 代わるか？

アラタ いや…。

サエ、電話を受け取る準備をしている。

アラタ いいや。うん。

カズラ あ。そう？じゃ。
アラタ おう。

サエ、カズラ、郵便屋さん。捌け。アラタだけになる。

アラタ 帰ってくるときになんか買つといて…。あ、お前の財布で買えよ。
うん。じゃあ。

アラタ、電話を切る。

アラタ …。

アラタ黄色いカンの箱を見つけ、蓋をしめようとする。と、その下に、先ほど自分が破いた補修された手紙がある。

アラタ あ…。

アラタ、手紙をみて中身を取り出そうとしたところにミキトがやってくる。

ミキト あ。

アラタ ああ。

ミキト お邪魔してます。

アラタ すいません、あ、

ミキト お父様はちよつとお手洗いに。

アラタ そうですか。

ミキトゆつくり座る。

アラタ 何か飲みます…？

ミキト あ、いえ、お構いなく。

アラタ そうですか…。

ミキト すごく、居心地良いですね。このお家。

アラタ 見たいですね。みんなそういうんですよ。

ミキト みんな？

アラタ カズラとか。

ミキト ああ、あのこう…背の…。

アラタ ああそうです。低い。

ミキト いやあの、小柄な。

アラタ 良いんですよ。そんな気使わなくて。

ミキト はあ。

アラタ …。

ミキト …。

少しの静寂。

ミキト …いつも何の話してましたかね。

アラタ え？

ミキト 私と、

アラタ 僕。

ミキト はい。

アラタ なんでしたかね。
ミキト いつも病院でね、
アラタ ねえ。こう、ああ。
ミキト あ、お母様の話をね…。すみません。
アラタ いえ…。

少しの静寂。

ミキト …僕静かなの駄目なんです。
アラタ はあ。

ミキト 何か話しませんか？

アラタ 何しましょうか。

ミキト …結婚するんですよ。

アラタ らしいですね。

ミキト ご存知でしたか。

アラタ ええ。父が。

ミキト やっぱり仲良いんですね。

アラタ いや、

ミキト お父様にも言ったんですけどね。プロポーズ成功しまして。日取りも。決まりました。

アラタ そうですか。

ミキト これ、

ミキト、招待状を出す。

ミキト こんな時ですけど、

アラタ ホントこんな時にですね。

ミキト お父様にも言われました。あはは。

アラタ はあ。

ミキト お父様に、言ったんですよ。「お父様みたいな旦那様になりたい」って。

アラタ …。

ミキト お父さま、遅いですね。大ですかね。

アラタ ああ。

ミキト あ、すいません。下品でしたね。はは。

アラタ 父には伝えておくので、大丈夫ですよ。

ミキト …あ、すいません。そうですね。

ミキト、立ち上がる時に、カンを落としてしまう。

ミキト ああ！すいません。

アラタ いえ、

ミキト、アラタカンから落ちた手紙を拾い集める。その時に破られた手紙を見つける。

ミキト あれ。

アラタ ああ。

アラタ、それを奪い。

アラタ 破れてるのもあるんですね。

アラタ、カンに仕舞う。

ミキト それ、

アラタ はい。

ミキト ……お母様からのですよね。

アラタ ……

ミキト ……読みましたか？

アラタ いえ、まだ。

ミキト そうですか。

アラタ というか、これ、僕にじゃなかったんで。

ミキト ……え？

アラタ いや…娘に当てた、手紙なんで。

ミキト ……

アラタ 居たんですって。母さんと父さんの、「本当の娘」ってのが。

ミキト ……

アラタ 知らなかったんですよ。僕。20年以上一緒に居て、知らなかったんです。

ミキト ……知ってます。

アラタ え？

ミキト 聞きました。お母様から。入院してた時に、娘も居るのよって。笑って、教えてくれたんですよ。

アラタ ……本当に俺だけ知らなかったのか。

ミキト でも、

アラタ でも、

ミキト お亡くなりになってたのは…知らなかったです。今日まで。

アラタ え？

ミキト 先ほど、お父様から聞きました。ああ、やっぱりそうだったんだって。

アラタ ……

ミキト ……娘さんの昔話がよく、お母様から聞きました。

アラタ ……

ミキト アラタ君の話も、よく、聞きました。小さい頃に、引き取ったんだって。

……すぐく、静かな子で、カメラが好きで。

……分解して直せなくて、お父さんが必死に直したけど駄目で、って。

アラタ ありましたね、そんなこと。

カズラ、サエ、帰宅。

ミキト ずっと、楽しそうにお話されてたんです。アラタ君のことも、ユメさんのことも。

カズラ、サエ立ち止まる。

アラタ お帰り。

カズラ ただいま。ファンタ買ってきた。あと、携帯…。

アラタ ありがとう。悪かったな。

カズラ 俺もごめん。てつきり外出ちやったとおもってさあ。

サエ あ。

カズラ なんすか。

サエ ……いや、なんでもない、かな。

叔父、戻ってくる。

叔父 すいません、ちょっと水が流れなくて…。
アラタ …。

叔父 …帰ってたのか。二人とも、ありがとうね。

サエ いや、

カズラ アラタ家に居たみたいで。すいません。俺がとちりました。

叔父 え？

アラタ うん。

叔父 …そうか。

サエ アラタ。

アラタ なに？

サエ おじさんに、言うこと、あるでしょ。

アラタ …。

サエ アラタ。

アラタ 何もないよ。

サエ あんたねえ。

アラタ サエさんは関係ないだろ。

サエ …そうだけど、

カズラ それは、

アラタ なんだよ。

カズラ 今のはアラタが悪いよ。めっちゃ心配してたんだから。サエさん。

アラタ 娘がいたこと今まで隠してたから？

カズラ え？

アラタ ミキトさんも知ってたんだって。

サエ え？

ミキト はい。お母様から、聞いてました。

アラタ だっけさ。

サエ …。

アラタ 俺とカズラだけ、知らなかったんだっけさ。

カズラ …。

アラタ …思い出せないんだよ。

カズラ え？

アラタ 思い出せないんだよ、本当の父さんと母さんの顔。

サエ …。

アラタ ここに引き取られた日に、俺、父さんになんていったか覚えてる？

叔父 父さんと母さんは何処って。聞かれたな。

アラタ …。

叔父 覚えてるよ。

アラタ その時は、覚えてたはずなんだよ。父さんと母さんの顔。絶対に。

サエ 覚えてたんだよ。絶対。

アラタ でも、思い出せなくなってるんだ。もう。

サエ アラタ。

アラタ ぼんやりは思い出せるんだ。遊園地連れてってもらったり、してたと思う。

父さんと母さんなかなか帰ってこなくて不安だったあの日のことも覚えてる。

いろんな人が来て、君はどうしたい？新しいお父さんとお母さん見つかったよって、

誰かに言われたのも覚えてるのに。本当の父さんと母さんのこと、もうぼんやりとしか

思い出せないんだよ。父さんと母さんのせいで。

叔父 アラタ。

アラタ 怖かったんだよ。忘れられるのが。母さんに忘れられるのが怖かったんだ。覚悟してた

はずなんだよ。俺は大丈夫だと思ってたんだよ…思ってたんだよ。

でも、母さんが病室に戻ってこなかったあの日、母さんは俺のことを忘れて、真っ先に

父さんの元に行つて行つたじゃないか。「ユメが居ないの。ユメは何処。」って、必死に。必死に。そりやそうだよ、母さんにとつての子供はユメで、俺じゃなかったんだから。本当の子供の方が大事だから。義理の息子より、本当の娘の方が大事だったんだから。アラタ君。

アラタ いろんな人に気使つてたよ。俺。世話になつてる身だからって。本当の息子じゃないんだからって。でも、そんなの知らないうちに無くなつててさ……。本当の父さんと母さんだつて、俺は：俺は思つてたんだよ、知らないうちに。

怖かつたんだよ、母さんに会うのが、母さんに忘れられるのが。

この家の子供じゃなくなるのが、怖くて堪らなかつたんだよ。

そしたらさあ。本当に、俺、この家の子じゃなかつたから。娘さんがいたから。俺じゃない。本当の娘が。

ミキト、母からの手紙を拾い上げる。

叔父 お前は、本当の息子だよ。俺の。俺の息子だよ。

アラタ じゃあなんで教えてくれなかつたんだよ。

叔父 それは、

アラタ 俺そんなの聞いただけじゃ何とも思わないよ。思わなかつたんだよ。

叔父 言えなかつたんだよ。言えなかつたんだよ。

アラタ なんて……。

叔父 母さんと、二人で、決めたんだ。大きくなつたら言おう。って、

そしたら、母さん、入院して……。それで言えなかつただけなんだ。

アラタ だけって……なんだよそれ。言えなかつただけって。納得できるかよ。

ミキト 僕が保証します。アラタ君は、絶対に本当の家族です。

叔父 ミキト君……。

ミキト これは絶対にお母さんから、アラタ君にあてた手紙なんです。間違いありません。僕が見てましたから。絶対にそうなんです。お母様は、アラタ君のこと忘れてなんかいません。

アラタ君が来なくなつてからも、お母様はずっとアラタ君の話をしてました。写真が好きだ。カズラつて友達がいる。サエさんという方が隣に住んでる。

清水さんって人は向かいの人だ。息子と旦那に心配されてるから早く良くならなきゃ。

この手紙だつて、お母様にかけてきてほしいと言われて僕が買って来たんです。ピンクの便箋が好きなのって。だから、読んでください。

ちりーん、と郵便屋さんが。

郵便 お手紙ですー。

サエ あ……。思い出した。

アラタ え？

舞台上にトマリとメグミが出てくる。

トマリ メグミ。

メグミ ……何。

トマリ サエ、嘘ついた。

メグミ ……なにが。

トマリ 怒ってるじゃん。

メグミ なにが。

トマリ 絶対謝らないからな。

郵便の人、過去へ。

郵便 おーい。
トマリ わぁ！

郵便 そんなに驚かなくても…。
メグミ なんですか。

郵便 そんなに怒らなくても。

メグミ 怒ってないし。

郵便 二人に、お手紙だよ。
二人 え？

郵便 こっちは、メグミ君。こっちは…うんトマリ君だね。

サエ 手紙くれたんだよ。ユメが。

郵便 はい。これで大丈夫だね。ではまた、
二人 ユメ（ちゃん）から…。

ユメ登場、郵便の人と入れ替わり。二人は、手紙を隠しながらその場で読む。

ユメ トマリへ。まず手紙の書き方を勉強しましょう。

トマリ あと、字が汚くて読めません。これはすぐ直してください。お返事が書けません。
ユメ 頑張る。

トマリ お父さんの字はすごく上手です。私も真似してますがなかなかできません。やっぱりお父さんはすごいです。

トマリ うん。

ユメ メグミへ。メグミはいつも知らない事を教えてくれたり、手紙の出し方を教えてくれたりしてくれるのです。すごいないつも思っています。これからもいろいろ教えてください。教えるよ。うん。

メグミ トマリがいじめてきたらすぐに言ってください。やっつけます。パンチされたらキックし返せばいいってお父さんが言っていました。

メグミ やってみる。

ユメ これからもみんなで仲良くしましょう。大人になっても。みんなで仲良く。約束です。また、手紙書こうね。ばいばーい。ユメより。

二人 うん…。

ユメ サエちゃんへ。いつつもしやべってるから書くことあんまりないです。でも、書きたいことはたくさんあります。ずっと友達で居ようね。

メグミも、トマリも一緒に。四人で仲良くしようね。けんかした時は、みんなで仲直りしようね。約束です。

サエ 約束…。

サエ、過去の二人の元へ行く。

メグミ トマリ、ごめん。ごめんね。

トマリ メグミもごめん。突き飛ばしてごめん。

メグミ うん、痛かった。

トマリ やり返せ。

メグミ いいの？

トマリ 良いよ。

メグミ、トマリをコずく。

トマリ 本気じゃないから駄目！
メグミ いいよ。

トマリ 駄目だ。そうじゃないと。

メグミ じゃないと。

トマリ ユメに笑われる。お前も本気出さないと笑われるぞ。

メグミ わかった。

メグミ、びんたをする。派手に痛がるトマリ。

メグミ ああ！ごめん！手痛い！

サエ ちよつと！

メグミ ちがうんだよ！トマリが！手痛い。

サエ トマリ。大丈夫？

トマリ 痛い。

メグミ ごめん。

トマリ 痛い。痛いよ。

メグミ 泣くなよ。

トマリ 泣いてねえよ。お前も泣くなよ。

メグミ 泣かないよ。泣かないよ。

トマリ これでお相子だから。

メグミ うん。

サエ じゃあ、仲直りの握手。

トマリ、ワザとにメグミの痛めた方の手を握る。

メグミ 痛い痛い痛い！

サエ トマリ！

メグミ これで本当にお相子！

トマリ、捌けてく。

メグミ もう一発びんたさせろー。

メグミも、捌けていく。

郵便の人のちりーんという音がする。サエははっとして、郵便屋さんから手紙を受け取る。

郵便 では、これで。

サエ ありがとうございます。

郵便 いえいえ。

サエ 本当にありがとうございます。

郵便 …いいんですよ。

郵便の人捌けていく。

サエ 読まなきや、アラタが。手紙。

カズラ サエさん。

サエ 持ってて。

カズラ はい…。

サエ、郵便の人からもらった手紙の束をカズラに渡し。

サエ お母さんからの手紙だよ。間違いないですよね。

ミキト はい。

アラタ でも、

サエ 最後の手紙なんだよ。お母さんからの。

アラタ ……

叔父 読んでやってくれ。アラタ。

アラタ 父さん。

叔父 母さん、アラタについて書いたんだって。手紙。お前について。

アラタ ……

叔父 頼む。読んでくれ。俺も知りたいんだ、母さんが最後にアラタになんて言ったのか。

アラタ、ゆっくりと手紙を開ける。

アラタ —アラタへ。アラタに手紙を書くのは初めてですね。

アラタは、いつもお父さんとお母さんの事を考えてくれて本当にうれしい限りです。

何かあると、アラタに頼ってばかりで。いつも本当にありがとう。

ごめんなさい。お母さん最近物忘れが多くて、思い出せるうちに書き留めておきます。

アラタに、伝えなければならぬことがあります。

お母さんと、お父さんには娘がいました。事故で、亡くなりました。

アラタが来る、3年前の話です。

家にはアラタが来たあの日、忘れもしません。おびえて、泣き出しそうなアラタを見て、ああ、この子も辛かったんだ。と思いました。

アラタのことを引き取ったのは、この子は私たちと同じだと思ったからです。

家族を亡くした、不幸な子だからって。

でも、一緒に暮らしてくうちに、そんなこと、どうでもよくなっちゃいました。

本当よ。だって、あまりにもお父さんに似てるんだもの。

いろんな人に気を使って、小心者で、みんなに愛されて。カメラだってお父さんの趣味だったのに。アラタは仕事にしちゃいましたね。お父さんたら、俺の夢だったのについてお母さんにぐちぐち言うのよ。

お父さんとお話して、いつか、アラタが大きくなったら私から伝えようと。お父さんと約束をしました。こんな形で伝えて、ごめんなさい。

お父さんは、いつも明るく、なんでもないように振舞っていますが、本当は小心者だし。すごく、かわいい人です。それでいて、お母さんの事も、アラタのことも、亡くなったユメのこともすごく、すごく愛してくれる、器の大きな人です。だから結婚したんですよ。アラタなら知っているわよね。だって私の息子だもの。

本当は、もつと元気なうちに直接アラタにお話できたらなと思いました。本当はもつとお話したかったのよ。最近写真のお仕事はどうなの？ちゃんどご飯食べてる？彼女は居るの？ミキトさんは結婚するんだよ？アラタは？どうなの？話したいこといっぱいあります。今度、来た時に質問攻めです。覚悟してください。お父さんと、仲良くね。喧嘩しちゃだめよ。お母さんは、アラタの味方です。長くなっちゃいましたね。最後まで読んでくれてありがとう。またね。

母より—
…母さん。
カズラ アラタに書いたんだ、おばさん。
ミキト はい。

アラタ、ゆっくり手紙をたたむ。

アラタ ごめん。ごめんなさい。ごめんなさい、母さん。

アラタ、叔父、暫くそのまま。

カズラ …俺、友達なのに、何も知らなかった。やっぱりおばさんすげえよ。なあ。

すげえよ。…お前の母さん。

アラタ …ごめんなさい、ごめんなさい。

サエ 許すって、許すからさあ。

アラタ ごめんなさい。

サエ もういいから。もう、本当に。大丈夫だから。

アラタ ごめんよ。本当に。

サエ うん…。

叔父、アラタのそばへ。

カズラ おじさん…。

叔父 アラタ。

アラタ …。

叔父 すまない。

アラタ 父さん。

叔父 アラタ、すまなかった。本当に。すまない。

アラタ、頷くだけ。

アラタ …もつと、見舞いに行ったらなあ…。

叔父 良いんだ。

アラタ なんて…。なんで、逃げちゃったかなあ…。

叔父 良いんだ。

アラタ 母さんに、嫌われちゃったかなあ…。

叔父 ならない。絶対にならない。

叔父、アラタの手にある手紙をつかみ、

叔父 書いてあったろう。ここに、味方だって。母さん。お前の味方だって。

アラタ …。

アラタ、頷くことしかできない。

叔父 怖かったな、アラタ。怖がらせて、すまなかった。

アラタ、黙っている。

叔父 父さんも怖くてな、お前に、嫌われるんじゃないかって。

母さんも、父さんも、怖くて。

だから…。だから、言えなくて。だから、

アラタ、黙って聞いている。

叔父 父さんの事、嫌いにならないでくれ。

アラタは、声も無く、頷く。

叔父　　そうか…。ありがとう。ありがとう。

叔父と、アラタは向かい会う形で互いに頭を垂らしている。

サエ　　やっぱり、すごいなあ…。

カズラ　え？

サエ　　…カズラ君、ありがとう。

カズラ　何かしました？

サエ　　うん。やっぱりアラタの友達なんだね。

カズラ　はい。こいついいやつなんで。サエさんもいいやつです。

サエ　　ありがとう。

ミキト　すみません。

カズラ　はい。

ミキト　職場からとてつもなく電話きてて、一回出てもいいですかね。

カズラ　どうぞどうぞ。

ミキト　すみません、すみません。

ミキト、家から出ながら。

ミキト　お疲れ様です、はい、あ、書類は、はい。渡しまして、いやあ、ちょっと帰れなくなつてました。はい、もう大丈夫だと思いますので。

ミキト、家の前で背を向けて電話を続ける。ユメ、家の中に現れる。

叔父　　…、アラタ。

アラタ　なんだよ。

叔父　　父さんもな、怖かったんだよ。

アラタ　…うん。

叔父　　何かあるたびに、ユメが横切るんだ。

アラタ　…。

叔父　　いいんだろうか、こんな幸せでつて。思ってしまったんだ。

アラタ　…俺も。思うよ。父さんと母さんに。

叔父　　な、思うよな。思っちゃうんだよ…。

サエ、アラタを見る、ユメは、叔父の背中から。

サエ　　「たのしそうでいいなあ。」って笑ってると思う。だって、ユメだもん。

ユメは、捌けていく。カズラだけ、少し置いてユメの居た方を見ているように見える。

アラタ　…そう。

サエ　　きつとね。

アラタ　母さんに似てるの？

叔父　　ああ。

アラタ　そっか。

叔父　　アラタは完全に、俺に似たな。

カズラ　ですね。

サエ　　知らないでしょ。

カズラ そんな気がするの。

ミキト、帰ってくる。

ミキト ああ、ごめんなさい。

サエ いえいえ。

カズラ 大丈夫なんですか？

ミキト すぐ戻るって言って、まあ、暫くいましたからね。帰って怒られます。

カズラ そのまま帰ってもいいのに。

ミキト お別れのあいさつはちゃんとしないと。

カズラ 真面目え…。

ミキト あの。

アラタ …はい。

ミキト お手紙、渡せてよかったです。

アラタ はい。

ミキト それと…。

アラタ はい。結婚式、写真。お願いしたいんです。

アラタ …。

ミキト アラタ君に、撮ってほしかったんです。お母様に、お話聞いてからずっと。

アラタ わかりました。

ミキト かつこよく撮ってください。

アラタ 大丈夫ですよ。

ミキト すいません。では。

ミキト、そそくさと。

ミキト お邪魔しました。

カズラ 仕事ゲットだな。

アラタ …おう。

カズラ 元気出せよ。モテないぞ。

アラタ 元気でも、

カズラ …そうだな。でも、元気な方がモテるよ。たぶん。

アラタ だな。

サエ あ、

サエ、時計を見て、

サエ こんな時間…。

カズラ 俺は泊まるんで。

サエ え。

カズラ へ？

サエ …。まあいいや。

カズラ なんすか。

サエ 私は帰るから。

カズラ 帰るって隣だけだね。

サエ まあ、そうだね。

叔父 サエちゃん。ありがとうね。

サエ いえ、あの。

叔父 なんだい。

サエ 二人とも、ごめんなさい。
叔父 え。

サエ その、ユメの事。

叔父 ……

サエ どうしても、アラタにも知ってほしかったの。家族だから。

アラタ ……うん。

サエ だから、話した、のき。うん。

アラタ ありがとう。

サエ うん。…帰るね。

サエ、立ち上がり

アラタ また、明日ね。よろしく。いろいろ。

サエ うん。お邪魔しました。

サエ、家から出る。

アラタ、少し見送る。

カズラ あー。なんか疲れたなあ。

叔父 ごめんねえ、

アラタ 本当に帰らないんだ。

カズラ 駄目？

アラタ 駄目じゃないけどさ。

カズラ お泊りセット用意しちゃったから。あと、外走り回ったからもう動きたくない。足めっちゃ痛い。

アラタ ごめん。

カズラ ああ、いいよ。許してやるよ。家にいるのはずるいわ。

アラタ それは勝手に飛び出しただけじゃない。

カズラ そうね、早とちりしてごめん。あと財布と携帯もごめん。

アラタ 許す。

カズラ 優しいのね。

アラタ まあな。

カズラ ……腹減った。

アラタ なんもないぞ。

叔父 店屋物頼むか。かつ井とか。

カズラ え。いいんですか。すみませんなんか。

二人 自分で払え。

カズラ 親子出してくるなよ。

アラタ だしてねえよ。

カズラ よし、あ。

アラタ ん？

カズラ 靴下…。

アラタ まだ変えてねえのかよ。

カズラ だって、バツバツバツしてたから。忘れてたんだよ。お前が悪い。

アラタ ああ、変えて来い。

カズラ、二階へと捌ける。

叔父 靴下？

アラタ 父さんの借りてきてかかところが気持ち悪いんだって。

叔父 ああ。あるなあ。

アラタ なあ。

叔父 アラタ、

アラタ ……なんだよ。

叔父 すまなかった、

アラタ 俺も、ちよつと子供すぎた。ごめん。

叔父 良いんだよ。

アラタ おう。

叔父 お前は、いつまでも俺の子供なんだから、わがままぐらい言ってくれ。

アラタ ……父さん。

叔父 父さんも、アラタには、わがまま言うから。な。

アラタ いいよ。何でも言ってくれ。これからは。

叔父 これからはな。

叔父、店屋物のカタログを広げる。

叔父 そばでいいか？

アラタ えー。ラーメンが良い。

叔父 ラーメンはちよつと明日怖いなあ。

アラタ じゃあ、丼物は？

叔父 ……駄目だ、営業時間すぎてる。

アラタ じゃあ、カレー。

叔父 カレーなら、ほら、カレーそばあるぞ。

アラタ 別物だろそれ。

叔父 あ、カレーならレトルトあるぞ？

アラタ なんて俺だけちよつとランクダウンなんだよ。

叔父 父さんのわがまま。そば食べたい。

アラタ 俺はカレー食べたい。つてかカップめんのそば会ったろ。緑の、

叔父 あー。もうわかった。

アラタ 観念してカップめん。

叔父 俺はカップめんを食べよう。

アラタ よし。

叔父 お前はレトルトカレーだ。

アラタ はあ？

叔父 痛み分けた。これで文句あるまい。用意してくる。

アラタを残し、叔父、捌けていく。

アラタ 父さん、ちよつと。おおい。

アラタ、カレーのチラシを見て。

アラタ カレー…。

カズラ、下りてくる。

カズラ お待たせ。お。カレーにしたの？俺カツカレー。

アラタ いや、レトルト。

カズラ え？

アラタ そばとカレーで別れて、痛み分けてレトルトになった。
カズラ そしたら二つとも頼めばいいのに。

アラタ …あ。

カズラ あーあ。

アラタ ちよっと待ってて。

カズラ おう。

カズラ、アラタから渡された。チラシを眺めてる。

アラタ 父さん。父さんてば。

アラタ、捌ける。

カズラ カレー良いなあ。チキンカツもあるんだあ…。

カズラ、座って、机の上に母からの手紙を見つける。

カズラ …なんか入ってる？

カズラ、横から覗いてみる。

カズラ さわるよー、

アラタからの返答はない。

カズラ もう…。

母親からの手紙の中から自分の証明写真が出てくる。

カズラ あ！俺の写真…。

カズラ、喜びながら。アラタと、叔父に向かって。

カズラ おばさん俺のことおもいだしたんじゃない？

暗転。

幕

遊畏坊ハイソウ公演

「お手紙。」

作・I J I N

©演劇集団遊畏坊〜Aso Bin Bou〜